

主体的に取り組む 言語活動の 工夫

新課程のねらいを実現する手段として、
思考力・判断力・表現力を高める言語活動の充実に
取り組む学校は多いが、学校現場からは

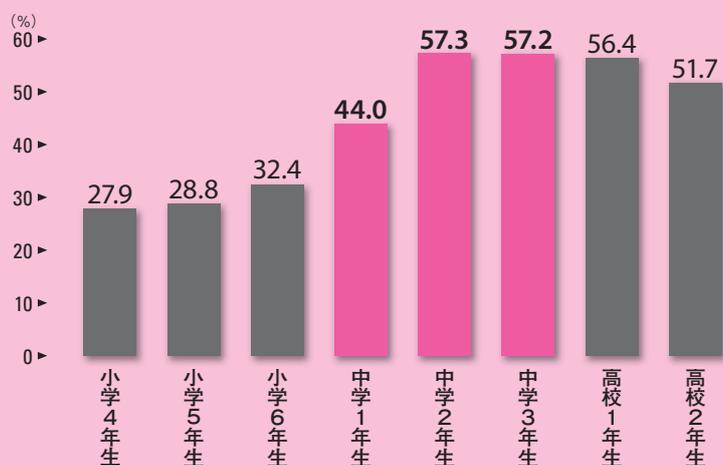
「今一つ、効果的な授業への落とし込み方が分からない」

「言語活動を通して、生徒の思考や判断に深まりが見られない」

という声も聞こえてくる。そこで、今号の特集では、

生徒が主体的に参加する言語活動とするための指導の工夫を考える。

学習に意味を見いだせない子どもは
学年が上がるにつれて増加。中2生で約6割



「どうしてこんなことを勉強しなければいけないのかと思う」という質問に、「とても
そう思う」「まあそう思う」と答えた割合

出典/ベネッセ教育研究開発センター「第2回子ども生活実態基本調査」(2009)

言語活動をより深めるために 生徒が主体的に取り組める課題設定を

新課程の移行期間から言語活動の充実をテーマに据えた授業研究に取り組んできた学校は少なくない。学校全体の教育活動に言語活動をどう位置付けるか、取り組みが進む一方、授業への落とし込みについて、さまざまな課題も挙がっている。現在の言語活動の現状と課題を整理し、より効果的な言語活動にするための指導の工夫をまとめる。

『VIEW21』読者モニターの声に見る 「言語活動」の現状と指導の課題

現状

- ・単元の途中で、課題に対する生徒自身の意見を伝えたり、グループで意見交換をさせたりする場を仕組んでいるが、なかなか議論が活性化しない
- ・その日の授業で学んだことを生徒自身の言葉で振り返らせているが、「ためになった」「面白かった」など、短文・感想レベルの内容からなかなか質が向上しない

指導の課題

- ・学校全体で言語活動を通してどのような力を育てたいかの目線はそろってきたが、各教科の指導への落とし込み方が難しい
- ・生徒が言語活動を通して思考、判断、表現した内容について、教師がどこをどう評価し、次の指導につなげていくか、評価指標の設定の仕方が難しい
- ・保護者や生徒が求めている高校受験対策としての知識注入型の授業が、どうしても増えてしまう

課題解決に向けた指導のヒント

理論編

- ・これからの社会で必要とされる力を見据えた上で、必要なことを授業に具体化する
- ・「教える生徒」と「教わる生徒」が固定化しない、学習の本質にかかわる課題を提示する
- ・生徒の「分からない」から授業をつくり、分からない生徒の自己肯定感を高める

▶▶▶ P.6 横浜国立大教授 高木展郎

実践編

- ・生徒の「学びをひらく」ための「リアルな問い」を全ての教科で設定し、学ぶ意味や価値、必然性を高める
- ・教科共通の単元カリキュラムをベースに、教科特性を生かしながら授業改善を行う
- ・授業で生徒同士の活発な対話を促すためには、まず教師同士が教科を超えてどう学ばせたいのかについてアイデアを出し合い、学び合う風土をつくる

▶▶▶ P.10 佐賀県小城市立三日月中学校

- ・「分からないことは良いことである」という意識をクラス全体、学校全体で共有し、生徒の「分からない」を引き出し、そこから授業を組み立てる
- ・「まなびのステップ」を活用することで、教師と生徒で目指す「言語活動」の質の目線合わせを行う
- ・研究授業後の研究協議に生徒も参加し、「授業は自分たちがつくる」という意識を浸透させる

▶▶▶ P.17 大阪府高槻市立冠中学校